

第71回 十和田八幡平駅伝全国大会

【出場結果】

実施日 : 8月7日(火) スタート時間 : 8:00

コース : 十和田湖休屋~八幡平大沼

総距離 : 5区間 71.6km チーム成績 : 4時間3分38秒 12/21位

出場者・リザルト	:	1区	親崎 達朗	8/21位	41分48秒
		2区	土屋 天地	18/21位	40分49秒
		3区	平塚 祐三	16/21位	52分25秒
		4区	石原 洸	7/21位	52分47秒
		5区	松本 流星	11/21位	55分49秒

【レポート】

長距離界では夏の風物詩となっている本大会がレース当日を迎えた。

世界的にも連日、猛暑報道が流れ、日本最高や地域最高気温を更新したなど、これまで経験したことのないような気候が続き、思うような練習もままならない日が続いたが、当日のスタート地点の気温は、なんと15℃切……

これまでの暑さが唾のように肌寒く感じるが、選手達には絶好のコンディションの中でいよいよレースが始まった。

例年、本大会は実業団、大学チーム合わせて30チーム以上が全国から出場する大会で、レベルの高いチーム同志が真夏の暑さの中で覇を競い合うのが魅力の駅伝だが、今年はエントリー22チームの内1チームが棄権し、全21チームの最終エントリーと、例年から比べると少々エントリー数も寂しく、更には気象条件的にも恵まれ過ぎたため、この駅伝の面白味が半減してしまった。

しかし、当社チームとしては、11月3日に行われる東日本実業団駅伝の競合チームも数チーム出場しており、現状で当社及び他社チーム状態を把握するには良い機会となった。

まず、1区のコースは、十和田湖畔をスタートし、約5kmを湖畔沿いに時折右に左にカーブしながら進んでいく。そこから高低差200mの厳しい峠道をくねくねと4km駆け上り、峠の頂上から今度は高低差270mを4km一気に中滝の中継所まで駆け下るという非常に起伏にとんだコースで、距離は13.2kmと短いものの、アップダウンもあり、更に例年は暑さもあって、走力だけでなく適性や忍耐力、精神力が求められる。

暑い夏に開催される駅伝だけあって、伴走車の伴走及び給水が認められており、身体に水を掛けるシャワーや柄杓を使用するチームも多い。

今年当社の1区には好調を維持している新人の親崎を起用した。

現在は電装事業本部管理部生産管理課に所属し、まだ仕事見習い中の身であるが、入社後より安定した実力を発揮しており、春先の東日本実業団選手権では5000mで自己ベスト記録をマークしている。

今大会初出場のため、本人も走って見なければ分からないところはあるが、約5km付近から始まる発荷峠の厳しいアップダウンを攻略し、良い形でタスキをつないでチームにレースの良い流れを作りたいと期待する。

親崎は集中した表情で自信を持ってレースをスタート、外国人選手が形成する第1集団とは距離を空けて第2集団で湖畔のレース序盤を走る。

そこから苦手意識のある登りに入ったが、ペースは衰えることなく、伴走車の伴走が認められる発荷峠の頂上まで厳しい表情を見せることなく上ってきた。

ここで前田監督より給水を受取ると、更に後半は自身が得意とする急勾配の下りで伸びのある走りを披露、区間8位と41分台の好タイムで2区にタスキを渡した。



親崎！ 得意の下りで前を追うぞ！



勢いよく得意の下りを攻略する親崎

2区は、1区と変わって中継所まで緩やかな下りを13kmに亘り標高差190m下っていくコースで、下り基調のため軽快に歩を進められるが、例年のような暑さに見舞われると、前半は木陰に遮られている日差しが、ラスト3kmを切ると一気に視界が開けて直射を浴びるため、そこから脱水症状となり、棄権するチームもある。

距離が短く下りで走り易い区間であるが故、ついつい飛ばしてしまうと後々に痛い想いをするコースだが、今年は涼しいため、勢いに任せて気持ち良く走れるだろう。

親崎からタスキを受けて走り出した土屋は入社5年目で人事部労務課に所属している。もともとロード走に対する特性があり、入社1年目の立川ハーフマソンでは一般の部で当社ベスト記録で優勝し、翌年のニューカレドニア国際マソンにも派遣されている。

今回の状態としては故障上がりであり本調子では無かったものの、幸い涼しい天候にも恵まれ、3分10秒/kmを切るペースで終始レースを進めて確実に走り切り、区間18位の走りと、全体としては2つ順位は落としたものの、今後の復調を期待させる堅実な走りを披露した。



土屋のラストスパート！！

3区は、ほぼフラットなコースながら15.7kmと少々長丁場で、暑くなれば前半は日差しを遮るものの無いのどかな田んぼ道、中盤以降も国道沿いでほぼ日差しを遮るものもない中を、ただ暑さに耐え忍びながら走らなければならないガマンの区間だ。

一転、今年のように涼しかったり、雨が降ると平坦なコースだけに高速区間に早変わりし、走力のある選手達が一気に後続を引き離しに掛かる二面性を持つ区間でもある。

今年3区を走るのは入社3年目で電子デバイス事業本部管理部管理課に所属する平塚で、トラック競技の3000mを得意としており、昨年行われた全日本実業団陸上競技選手権では、自己ベスト記録をマークして6位入賞を果たしている。

平塚は最近調子を上げてきていることもあり、前半から思い切った走りで快調にレースを進め、前半5kmを2分50秒～55秒/kmのハイペースで飛ばす。

しかし、無理がたたって中盤以降は涼しいながら徐々に上がった気温にペースダウンし、前半の勢いから一転、10km過ぎでは4分/kmというジョキングペースとなる厳しい走りでブレーキを起し、最後は何とか走り抜いてタスキをつないだものの、順位を3つ落とす残念な走りとなった。

着実な走りで1秒を削ることが求められる駅伝において、調子が良くても冷静な判断により、後半にペースアップ出来るような走りが求められ、それが今後の課題である。

ShinDengen /



前半快調に飛ばす平塚

レースは後半に入り 4 区へ。

4 区は八幡平に向けた 15.9km を走る今大会最長区間で、中間地点からだらだらと上り
が続く、市街地から再び田んぼ道へコースが変わっていく。

暑さを伴うと、日差しを遮るものが無い中でじわじわと上りの疲労が蓄積し、走って
いるのが嫌になってくる厳しい区間だ。

今回 4 区に起用したのは、2008 年入社でエネルギーシステム事業部管理部管理課に所属
する入社 10 年目を迎えた大ベテランの石原で、皆さんもご承知の通り、彼は最近マラソン
に専念しており、今年の東京マラソンでは見事に 2 時間 20 分を切る 2 時間 18 分
33 秒の自己ベスト記録をマークした。ロードに減法強く悪条件を苦しめない安定感があり、
故障者も多い大変なチーム状態の中で、この区間を走ってもらうこととなった。

石原は、アップダウンの続く難しいコースをいつも通り冷静に 3 分 10 秒/km 前後の落ち
着いたペースで入り、持ち前のペース感覚により終始安定したレースを披露、後半の落ち
込みも最低限に留める職人らしい走りでも区間 7 位と順位を 1 つ上げ全体 12 位でタスキ
をつないだ。



終始安定した走りを披露した石原

レースはいよいよ最終区の5区へ。

5区は13.8kmと距離は短いものの、高低差は実に650mにも達し、ひたすらゴールまで上りが続く難コースである。

大会に全国から多くの実業団チームが出場していた49回大会までは距離が17.3kmと、上るだけでなく距離も最長と更に厳しいコースだった。

今年5区のアンカーを任されたのは、入社2年目で資材部購買課に所属する松本で、登りが得意なため初出場での7区挑戦となったが、昨年の男鹿駅伝においても起伏にとんだコースで最終区を務めて区間賞を獲得している。

松本は、スタートから上りの続くコースを落ち着いた表情で走り始め、中盤以降の勾配が厳しい登りでもフォームは乱れずに淡々とレースを進める。

終盤に入っても安定した走りは変わらず、結果的に順位を上げることは出来なかったが、最後まで粘りのある走りで区間11位、全体12位で無事にゴールした。

ShinDengen /



6区 石原 ⇒ 7区 松本へのタスキレ



大会後の記念撮影

【総括】

今大会の結果としては、2年前に出場した時の4時間9分51秒（総合16位）を大幅に上回る結果となりましたが、今回は気象条件に恵まれた部分が大きく、チームとしてはもっと上位を狙えた勿体ない大会であったと感じました。

今後は、11月の東日本実業団駅伝本番に向けて、8月11日～15日で実施予定の夏季強化合宿（妙高高原）でチーム力をしっかり蓄え、確実に結果を出せるチームとなるべく、日々のトレーニングを積んで参ります。

最後に、ご多忙中に遠路応援に駆け付けて頂きました工場管理部 北出部長、秋田新電元の高橋課長、高原様にこの場をお借りして御礼申し上げます。

今後も一丸となって精一杯活動して参りますので、引続きチームに対する温かいご声援を賜いますよう宜しくお願い致します。

以 上